

台湾の新石器時代 ～日本の縄文時代との比較～

27AR073

国際文化学部国際文化学科 3 年

松尾優里

目次

I.はじめに

- (1) 研究旅行の目的
- (2) 期待される成果
- (3) 研究旅行日程

II.調査地の概要

III.台湾の新石器時代について

- ① 早期
- ② 中期
- ③ 晩期

IV.まとめ－縄文時代と台湾新石器時代の比較

V.今後の課題

【参考文献】

I.はじめに

(1) 研究旅行の目的

私は現在日本考古学を専攻しており、これから縄文時代の研究を行おうと考えている。そのため、西南学院大学入学以降、福岡県内だけでなく鹿児島県や甲信越・関東地方にも足を運び、主に縄文土器を中心に学びを深めてきた。今回は台湾に目を向け、日本の縄文時代と同時期の台湾の新石器時代文化を比較し、東アジア的な視点から縄文時代を研究する基礎を準備したい。

今回の研究旅行では、台湾各地に所在する新石器時代の主要遺跡および関連博物館を訪問し、台湾考古学の展開と地域ごとの文化的特徴を理解することを目的とした。芝山巖遺跡は、台湾で最初に発見された新石器時代の遺跡である。柱穴を伴う巨石遺構を観察した。圓山遺跡公園は、貴重な多文化層遺跡であり、その構造と学術的価値について理解を深めた。国立台湾大学人類学系人類学博物館では、台湾の原住民の文化について学んだ。卑南遺跡公園では、卑南文化に属する台湾最大級の新石器時代集落遺跡を見学し、玉製装飾品・土器・石器をはじめとする豊富な出土資料から、当時の社会や生活様式について考察した。また、国立台湾史前文化博物館では、大坌坑文化や卑南文化を中心とした台湾全土の先史時代文化を、土器・石器・装飾品などの実物資料を通して体系的に理解した。さらに、中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館では、旧石器時代から清代・近現代に至る中国大陆および台湾の資料を見学するとともに、墓葬発掘による出土資料を総合的に確認し、考古資料の編年的・文化的連続性について考察する機会を得た。

また私は昨年度、国際文化学部主催の「戦争をフィールドワークする」のプログラムで台湾を訪れ、いくつかの博物館を見学した。そこでは展示方法において様々な工夫がされていることに気が付いた。今回考古学をテーマとした博物館を訪れるなかで、博物館展示における発掘や保存の方法などの考古学的方法論の応用についても考えた。

(2) 期待される成果

「台湾の新石器時代はいまからおよそ 6000 年前の西海岸に始まり、2000 年ごろまで続いた」(陳 2024: 67 頁) とされる。その間、各地で様々な文化を形成してきた。今回訪問した博物館や遺跡公園は、大坌坑 (Tapenkeng¹) 文化・卑南 (Peinan) 文化・圓山 (Yuanshan) 文化・牛罵頭 (Niumatou) 文化・大湖 (Dahu) 文化などといった台湾全土の先史時代の展示が行われており、土器・石器・装飾品・集落・墓域構造について焦点が当てられている。台湾新石器時代の考古学の総合的な展示を行っており、見学を通して台湾新石器時代についての総合的な知識の獲得ができる。また、そこで得た知識から縄文時代を比較し、農耕の有無といった生業や、装身具文化・埋葬、文様・製作方法などの特徴から土器・石器について比較して、両者の差異や類似点を考察する。

台湾の博物館で行われている考古学の展示を見学することで、台湾における展示実践や考古学の方法論を学ぶことができる。

¹ アルファベット表記は、拼音もしくは台湾で主に用いられている表記を用いている。

(3) 研究旅行日程

出発日	2025年 9月 9日	旅行日数 (発着日含む)
帰着日	2025年 9月 14日	6日間
	滞 在 地	行 動 ・ 調 査 内 容 (※レンタカー利用不可)
第1日目	台北市	BR105 (福岡 12:20 発 台北桃園 13:45 着)
第2日目	台北市	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国立台湾大学人類学系博物館見学 ・ 圓山文化遺址見学 ・ 芝山巖遺址見学
第3日目	台東市	AE391 (松山 7:35 発 台東 8:40 着) <ul style="list-style-type: none"> ・ 卑南遺址公園見学 ・ 国立台湾史前文化博物館康樂本館見学
第4日目	台東市、台南市	台湾鐵路 自強號 (3000) 372 (10:17 台東発 13:17 台南着) <ul style="list-style-type: none"> ・ 国立台湾史前文化博物館南科考古館見学
第5日目	台南市、台北市	台湾高鐵 1218 (台南 10:27 発 台北 11:54 着) <ul style="list-style-type: none"> ・ 中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館見学
第6日目	台北市	BR102 (台北桃園 15:10 発 福岡 18:20 着)

II. 調査地の概要

訪れた順に調査地の概要を説明する。

(1) 国立台湾大学人類学系人類学博物館

本館は5000点以上にのぼる貴重な文化人類学資料を展示しており、主に台湾の原住民（以降先住民族とする）の服飾や装飾品、住居や土器などを収蔵・展示している。人類学博物館が現在の位置に移転した際、資金不足のために考古学展示館を建設することができていない。現在も募金活動が行われており、私も参加してきた。具体的な予定は未定だが、今後考古学の展示室の整備や莫大な量の台湾内外の考古学資料の活用が期待され、私もまた訪れたい。



図1 国立台湾大学人類学系人類学博物館 筆者撮影

(2) 芝山巖遺址

芝山巖 (Zhishanyan) 遺跡は、台北市士林区に位置する。当遺跡は新石器時代晩期の人々が生活した場所である。台湾新石器時代は主に赤色土器もしくは黒色土器であるが、この遺跡から出土した土器は異例の黒彩土器であった。芝山巖公園の中には宗教施設の芝山巖惠濟宮など複数の施設がある。その一角に新石器時代人が巨石に穿った柱穴を見ることができる。また、展示スペースの「芝山巖探坑展示館」で積み重なった地層断面の展示も行われている。現地は野生のリスが生息するような自然豊かな公園で、市民の散歩道にもなっている。

(3) 圓山文化遺跡 (圓山貝塚)

圓山 (Yuanshan) 遺跡は台北市中山区に位置し、旧石器時代、新石器時代早期の大坌坑文化、中期の訊塘埔 (Xuntangpu) 文化、圓山文化、植物園 (Zhiwuyuan) 文化、そして鉄器時代の十三行 (Shisanhang) 文化の各層を包含する多文化層遺跡で、圓山文化の標準遺跡とされている。現在は国指定の「國定遺址」に指定されているが、実際に遺構などを直接見ることはできない。貝塚の保護区とバス停に似た「圓山時空驛站」のパネルの展示、そして公園の名前「圓山文化遺跡」から遺跡の存在を知ることができる。



図2 圓山文化公園 筆者撮影

(4) 卑南遺跡公園

卑南 (Peinan) 遺跡は台東県台東市、台東駅のすぐそばに位置する。新石器時代中期の赤色細縄文土器文化、晩期の卑南文化、鉄器時代の三和 (Sanho) 文化の三つの文化層が確認されている。卑南遺跡は1896年、日本の学者である鳥居龍蔵によって発見された。1980年に台東駅の建設工事に伴い、台湾大学考古学研究室のチームが13次にわたる発掘調査を実施した。そして2006年に「國定遺址」に指定された。

これら長年の調査の結果、精巧な玉製品や赤色の無文土器などを含む卑南文化に関する遺物は、卑南文化人の高度な工芸技術と美的感覚を示すものであるとされている。「台灣國寶」や「重要文化物」に指定されているものも5点含まれる。卑南遺跡の埋葬関連資料も重要であり、組み合わせ式石棺「石板棺」と玉製品を中心とする豊富な副葬品がある。農耕を主な生業形態とし、大集落と墓地によって形成された遺跡である。同時期のほかの地域と比べて、より一層発展した複雑社会であると考えられている。

卑南遺跡に関する展示館と発掘の様子をうかがうことができる遺構露出展示場、卑南文化の祭祀に関わるとされている「月形石柱」のほか、先住民族 (原住民) の住居も複数残されている。



図 3 卑南遺跡公園 筆者撮影

(5) 國立台湾史前文化博物館康樂本館

本博物館は、卑南遺跡から約5km離れたところに位置する。当館は、卑南遺跡の緊急発掘調査を契機として設立された。卑南遺跡は台湾新石器時代の中・晩期における非常に重要な遺跡であり、また環太平洋地域及び東南アジア最大の石棺墓群であると考えられている。その重要性から、保存のために現地に博物館が必要であると考えられた。そこで、卑南遺跡を拠点として1990年に博物館の準備室が置かれた。それから現在の位置に場所を変え、2002年に正式にオープンした。

現在では、大きく三つの課題に分かれた展示が行われている。一つは、旧石器時代から現代に至る台湾の歴史を考古学の観点から時代順に展示している。その中には卑南遺跡に関する展示も充実している。また、二つ目には台湾に生息した動植物など、台湾自然史に関する展示が、三つ目は台湾の先住民族が属するオーストロネシア語族 (南海語族) の文化の展示が行われている。

(6) 國立台湾史前文化博物館南科考古館

本館は、台湾の南西部にあたる台南県の南部科学工業園区 (Tainan Science Park) (以降、南科園区とする) に位置する。ここは新石器時代から鉄器時代、そして漢民族の文化まで多時期の遺構を含む。1990年代以降に南科園区の整備にあたって、台湾を代表する複数の重要な遺跡が発掘された。南科園区から出土した大量の先史遺物を保存・展示するために博物館が設立された。台湾の先史考古学の諸成果だけでなく、考古学の観点から、現代社会に対する問題解決の方法論の展示がなされている。そのほか、子供向けの「樂學考古」の展示が行われている。



図 4 國立台湾史前文化博物館南科考古館 筆者撮影

(7) 中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館

本館は学術研究の成果を展示の中心とし、「学術的博物館」とも称される。本館の2階には「歴史空間」が広がっており、「居延漢簡」(居延地方出土の漢代の木簡)、「珍藏図書」(貴重な図書)、「内閣大庫檔案」(清朝内閣の公文書)、「中國西南民族」、「豊碑拓片」(大碑文の拓本)、「台湾考古」の6つのテーマ展示が行われている。1階は「考古空間」が広がっており、時間を軸に、龍山文化・殷商文化・西周文化・東周文化にまたがる、戦前の中華民国時代時代に各地で集められた膨大な量の遺物が展示してある。



図 5 中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館 筆者撮影

III. 台湾の新石器時代について

台湾の新石器時代は、旧石器時代とほとんど関連性が認められず、新たに移入してきた人間集団の文化であったと考えられている(陳 2024: 67 頁)。しかしその源流地は未だに明らかになっておらず、またなぜ台湾島にやってきたかにも疑問が残り、現在でも注目を集めている。彼らは磨製石器や土器の製作技術を持ち、船で移住してきた。そのような彼らの技術が土台となり、場所や環境に応じて多様な文化が形成されてきた。今回の研究旅行でもその多種多様な文化や遺物を観察することができた。またそれだけではなく、台湾新石器時代の「第一人(最初の人)」は、新石器時代以降、鉄器時代や先住民民族へと連綿とつながる文化を形成してきた。台湾人のアイデンティティーをめぐる議論にも大きな影響を与えている。

台湾の新石器時代は西海岸から始まった(陳 2024: 67 頁)とされる。早期・中期・晩期に細分され、それらを北部・中部・南部・東部に区分し、検討が進められている。以下、文化ごとにその特徴と

課題を検討する。

① 早期：大坌坑 (Tapenkeng) 文化

台湾新石器時代早期において、現在唯一明らかなものは、大坌坑文化と呼ばれる。北部の海岸部・台北盆地・西南部海岸・東部海岸・澎湖諸島など、ほぼ台湾全土から確認されている。今回の研究旅行では、国立台湾史前文化博物館康楽本館と南科考古館で遺物を観察することができた。以下南部地域の新石器文化については、国立台湾史前文化博物館南科考古館の展示解説と臧振華・李匡悌の『南科的古文明』（2017）に多くを依拠した。

大坌坑文化は、完成された土器の製作技術をもつ人々によって形成されたとされている。口径と高さがほぼ同じで、胴体が球形の器形（罐）が中心である。その他にも多様な器形が知られており、同年代の縄文時代と異なる。

大坌坑文化には3種類の土器があるが、胎土の違いにより形や文様に差異が見られる。1つ目は、全体として暗褐色で、胎土に石英や雲母が含まれている土器である。これは大坌坑文化に代表的なものである（図6）。縄蓆文²や赤彩が施され、器形は壺や鉢が多い。2つ目は赤褐色の泥質の土器で、表面に化粧土「陶衣」をかけた土器である（図7）。器形は罐・瓶・鉢・器台を伴う坏である豆（高坏）・蓋などがある。罐は、胴部が球形で口縁部が反った形をした土器である。調理または貯蔵に用いられていたと考えられている。3つ目は淡褐色の泥質の土器（図8）で出土数は少ない。縄蓆文を施した罐形の土器がある。製作方法は、中形・大形の土器に関しては、胴部と口縁部、底部を別々に作り接合する技法が用いられていた。そして器面全体に縄蓆文が施されている。



図6 大坌坑文化の土器（左：鉢、右：罐）
（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影



図7 寛沿盆形豆
（国立台湾史前文化博物館南科考古館）筆者撮影



図8 敞口束頸圜底罐
（国立台湾史前文化博物館南科考古館）筆者撮影

² 縄蓆文とは、縄や蓆を巻き付けた板で器壁を叩き、器の表面に平行な縄目状の文様をつけたものを言う。一方、縄文時代の縄文の施文は回転施文によるものである。

また磨製石斧を中心とする石器も、すでに器種による材質の使い分けが行われており、その点における環境的・技術的知識の蓄積が見受けられる。開墾用の石斧・石鋤（図9）には、台湾島の西方約50 kmに位置する澎湖諸島の橄欖石や玄武岩を用いていた。石鑿と石鑿は木工用で、主に柄に縛り付けて掘削や削り取り、刻みなどの加工に用いられていた。こ



図9 斧鋤形器（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影

れら石鑿と石鑿には東部の変質玄武岩である西瓜石や安山岩・玉石を用いて作られていた。このように材料を選択し、それらを遠隔地から運搬していることから、彼らがすぐれた航海技術や険しい山岳を越える技術を持って交易を行っていたことがうかがわれる。また石鑿や、植物質素材の加工に用いられる有槽石棒も出土している。有槽石棒（図43）とは、主に植物素材の加工用として使われ、楮などの樹皮を布などに加工したり、繊維質の樹皮を打ち延ばしたりする際に用いる石器である。オーストロネシア語族の拡散・移動史と関連する重要な証拠とされている。

大坌坑文化の石器の製作技法としては剥離と研磨があり、穿孔技術も知られる。南部の大坌坑文化の遺跡では石器の材料や製作途中品、また砥石類の出土が少ないことから、現在知られている遺跡外に制作場所があったと推測されている。

そして大坌坑文化において特筆すべきものとして、海の資源の利用がある。優れた航海技術のもと、砂岩性の石錘「網錘」（図10）などの道具を使い、豊かな海の資源を利用していた痕跡が確認されている。初期は海産貝類が多くみられるが、次第に淡水貝類の利用が多くなり、資源を求める先が海から川へと変化している。また魚類も、沿岸でとることができる魚だけでなく大型の回遊魚も含まれており、季節的な漁撈に対する知識や航海技術を持っていたことがわかる。食用だけでなく、貝や魚の骨を利用した骨角器も残っている。特に台湾南部に位置する南関里



図10 網錘（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影

（Nankuanli）遺跡と南関里東(Nankuanli East)遺跡は、南科園区内の隣接しあう遺跡であるが、海との関係が深く、大量の貝製品が出土している。中でも貝包丁「貝刀」が大量に発掘され、「肩」がついているもの（図11左）とついていないものがあり、同じ遺跡から出土している石包丁「石刀」よりも刃部が精密で鋭くなっている。またスプーンや鉢、皿のような形を呈した貝製品（図11右）も出土している。これらは近くの海域で見られない貝が使用されており、広範囲に広がる交易が示唆される。耳飾りや腕輪などの装身具にも貝が多用されており、このように海洋資源を多く使用する点は大坌坑文化の特徴である。



図11 貝製品（左：有肩貝刀、右：貝器）

（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影

大坌坑文化は海の資源だけでなく陸上生物も利用していた。南科園区の大坌坑文化の遺跡からは多数の動物骨を研磨・穿孔して作られた、生活用具や装飾品である骨角器が出土している。石器に比べて成形が容易なため、より精巧な加工が可能であり、骨角器には陸上動物だけでなく海洋生物も利用されている。

また南関里遺跡から多数の動物遺骸も発見されており、当時の環境や生活の様子を示している。特筆すべきものは犬4体の完全骨格の出土である。その内2匹は南向きに埋葬されており、人間と同様に扱われていたと考えることもできる。これは台湾最古の犬の飼育の証拠であると考えられている(臧・李 2017:頁 112)。狩猟も行われており、エイの尾棘やノコギリエイの歯をそのまま利用するなど、骨鏃が多様な材料を用いて製作されている。植物についてみると、南関里東遺跡からは約2万粒のキビが出土しており、これは台湾最古の穀物農耕を示す証拠となっている。つまり、約5000年前の台湾ではすでに農耕が行われていたのである。南科園区の稲は台湾北部では出土しておらず、また東南アジア地域においても貴重なもので、人々の移動を考察するうえで重要な手掛かりとなるものである(臧・李 2017: 117頁)。また道具に関しては、石包丁の出土は少数にとどまり、収穫には主に貝包丁が用いられた。そしてすでに定住的な集落が確認されている。



図12 サメの牙 (國立台湾史前文化博物館) 筆者撮影

このように農耕・漁撈・狩猟・採集という多様な生産活動のもと集落が形成されていた。葬送儀礼をみると、南関里東遺跡では計83基の墓が出土し、いずれも集落内部に埋葬されている。埋葬方法はおもに3種類に分類されている。①墓穴を掘らずに遺体をそのまま貝塚におき副葬品を伴わないもの、②浅い墓穴を掘るもの(初期を中心)、そして③70cm程の墓穴を掘り木棺を使用した跡が見られるもの(後期)がある(臧・李 2017: 126頁)。後期の埋葬では、被葬者は基本的に仰向け・手足を伸ばした伸身直肢葬で、頭を南に向けて埋葬されている。副葬品には土器類と装飾品類があり、土器類の多くは壊れた状態で出土している。意図的に土器を破壊する葬送儀礼の存在がうかがわれる。装飾品は、貝や豚の牙、サメの歯などを穿孔して作られた首飾りや腕輪である。そして、埋葬の様子から遺体の一部を貝殻で覆う風習や戦闘行為の存在、また抜歯や首狩りといった儀礼の存在もうかがうことができる。

② 中期：赤色細縄文土器文化

② 中期：赤色細縄文土器文化

台湾新石器時代中期の文化を「赤色細縄文土器文化」と呼ぶ。ここでいう縄文とは、一般的に縄蓆文を指す。この時代は新石器文化の拡散が進んだ時代である。遺跡数が前期の大坌坑文化を上回るばかりでなく、遺跡の規模も大集落を形成している例が多い。

その結果それぞれの環境への適応が進み、地域の間文化の差異が生じるようになった。一方で、器

面に細い縄文が施されていることを特徴とする赤色細縄文土器文化という文化の名が示すように、高坏である「豆」という共通した器形や縄文を持つ土器は、台湾全土に分布する新石器時代中期の多くの遺跡に重複してみられる。

「細縄文」土器は、国立台湾史前文化博物館の展示解説によると、文様も非常に細かく、最も細い縄目の幅は0.1 cmの細さである。高度に発達した縄を撚る技術を見ることができ、また台湾各地に広がった文化が同一の起源をもつことも示すとされる。

(1) 北部

訊塘埔 (Xuntangpu) 文化が分布する北部は、器形とその豊かさが印象的である。橙色又は褐色の砂質の土器と橙色の泥質土器が主で、丸底で胴部が張った形の「鼓腹罐」が多く、一部に穿孔が施された環状の低い脚「圈足」を持つものも見られる。多くの土器は、大坌坑文化の外に反った低い口縁部と縄文による装飾を施す特徴がみられるが、一部の首周りの沈線文様は見られなくなっている。

(2) 中部

中部は牛罵頭 (Niumatou) 文化が分布し、主に大肚溪・濁水河流域に広がる。台中市の牛罵頭 (Niumatou) 遺跡や安和 (Anhe) 遺跡に代表的である。赤色や褐色の土器が多く、壺・鉢・盆・杯・豆など多様な器形を持つ。縄文が施されるなど早期の大坌坑文化の特徴を受け継いでいるが、縄文の縄目はより細かく精緻なものに変化し、主に口縁部や胴部に施されている。しかし後期になると縄文の割合も減少し、無文の土器が増加する。

(3) 東部

東部は富山 (Fushan) 文化が海岸山脈沿いに分布するが、その中でも北側と南側で違いがみられる。赤色細縄文文化の中でも、この富山文化の土器は比較的器台が低い印象を受けた。縄文が施された土器を主とし、壺や豆、少数の鉢といった単純な器形が好まれ、把手や脚部への装飾はまれである。一方南部は、赤色の砂質土器で、縄文の割合は少ない。器形は鉢形が多く、壺や盆、瓶なども確認されている。



図 13 新石器時代中期北部の土器 (蓋、罐、支脚)

(国立台湾史前文化博物館) 筆者撮影



図 14 新石器時代中期中部の土器

(国立台湾史前文化博物館) 筆者撮影



図 15 新石器時代中期東部の土器

(国立台湾史前文化博物館) 筆者撮影

(4) 南部

以後、南部地域に分布する新石器時代中期の牛稠子文化については実際に訪れた国立台湾史前文化博物館南科考古館の展示を見て考えた所見をもとに述べる。

南部の新石器時代中期の牛稠子文化は、約 4200～3800 年前の鎖港 (Suogang) 期と 3800～3300 年前の牛稠子 (Niuchouzi) 期に分けられる。前者はわずかに土器片が発掘されただけにとどまり、後者に至っても該当遺跡は右先方 (Youhsinfong) 遺跡のみである。

石器については、この時期も器種に応じた石材の選択がなされており、またその器種や出土数、素材の数も大坌坑文化と比べて豊富である。また片面だけを研磨したのものもある (臧・李 2017: 143 頁)。そして、玉製品もこの文化の特徴の一つであり、褐緑色を呈し、材質は閃玉である。これは花蓮県豊田産の玉材であり、製作途中破片が伴わないことから現地で製作されたものではないと考えられている。後述する台湾東部の玉製品とは様式が異なる。台湾東部は主に玦形器が多い一方で、右先方遺跡は玉環 (図 17) が多い。よって、台湾南部の牛稠子文化期の遺跡は、東部地域の先史時代とは異なる独自の玉製品の流通体系が存在していた可能性が高いと考えられている (臧・李 2017: 148 頁)。

土器において印象的であったのはその大きさで、特に甕棺に目を引かれた。ほかにも皿・瓶・豆・鉢・甕・陶蓋も出土している。赤褐色の土器が大多数を占めるが、少量の灰黒色土器や黒色の顔料を塗布した黒色土器も出土している。国立台湾史前文化博物館南科考古館の展示解説によると、器形については大坌坑文化とあまり変化が見られないが、貯蔵用の容器が一部大型化しており、食糧生産量の増加がうかがわれるようである。一方縄蓆文は器面から大幅に減少している。製作技法を示すものとしては



図 16 斧鋤形器

(国立台湾史前文化博物館南科考古館) 筆者撮影



図 17 玉環 (国立台湾史前文化博物館) 筆者撮影



図 18 陶蓋 (国立台湾史前文化博物館南科考古館) 筆者撮影



図 19 陶托

(国立台湾史前文化博物館南科考古館) 筆者撮影

土製宛具である陶托（図 19）が出土している。これは拍打法を用い、器壁の厚みを均一にするために使われていたと考えられている。また灰黒色の陶環（環状土製品）も出土しており、沈線が施されていた。

土器や石器は多様な一方で、骨角器の形式は少ない。しかし材料となった獣骨は哺乳類だけでなく魚類の骨も利用するなど、多様な材質が用いられている。動物遺骸は南部早期の南関里遺跡・南関里東遺跡の様子とは異なり、陸上哺乳類の割合が海上生物よりも多くなる。それも豚・鹿・犬・鼠・兎など多様であるが、豚の割合が最も多い。たんぱく源としての食糧利用だけでなく毛皮や骨角器など、生活用具や装飾品としても利用されていた。そして貝類の出土も早期に比べて少なくなる。イネ・アワ・マメ類など栽培植物の炭化植物種子も見つかっており、特にイネとアワに関しては形や大きさが均一であることから、この時期になると品種改良や選抜栽培といった高度に発達した農耕の存在を認めることができる。

また、牛稠子文化において明確な住居構造は確認されていないが、墓域の配置は明確に表れている。右先方遺跡では群集状に埋葬されており、それぞれの埋葬群は同一家族の構成員によるものであると考えられる。そこから、埋葬群の配置は家屋の配置と関係していたとも推定される。また、それら埋葬群のなかの墓は南北方向の同一線上に分布しており、秩序だった計画的な空間構造を持つことがわかっている。

この時代には右先方遺跡で6基の大形の甕棺墓が発見されているが、これは南科園区で発見された最も早い段階の甕棺墓である。またこれら甕棺の構造には、甕の上部に鉢形の蓋や土器片の蓋を置く点、大形の甕の底部を打ち抜いて底部から遺体を納める点、最後に大形の土器片や別の甕を底部にかぶせて封をする点など共通点を持つ。そしてこれら甕棺の埋葬されていた向きも共通していた。甕棺内も含め墓域からは副葬品はほとんど見つからず、葬送儀礼や社会階層を明確に示すには至っていない（臧・李 2017：164 頁）。



図 20 甕棺

（國立台灣史前文化博物館南科考古館）

筆者撮影

③ 晩期

新石器時代晩期になると、文化はより地域ごとの特色を強めていく。

(1) 北部

北部は新石器時代晩期になると圓山文化が出現する。圓山遺跡が代表的であり、約 3500~2500 年前にさかのぼる文化である。文化の分布地域は広く、また他の文化と同様に周辺地域と絶えず技術などの交流を行っていた。現在国指定「國定遺址」になっている圓山遺跡公園では、実際に貝塚や遺物を見ることができなかったが、国立台湾史前文化博物館康楽本館の展示品を観察した。土器は一对の把手や圈足（Quanzu）という環状の高台を持ち、また二つの口を持つなど特徴的な形態である。把手には刻目が施されている。一見儀礼的の意味も推測されるが、これらは実用性を高めるための工夫であるとされている。

圓山文化の石製品に特筆すべきものとしては、精緻な磨製の有段石鏃・有肩石斧（図 23）・匙形石斧がある。表面が丁寧な磨かれ、これらは独自の技術によって製作されており、他の集団と明確な違いがみられる。「有段」と「有肩」は石器を柄に固定するために適していたと考えられ、こちらにも明確な機能性が見て取れる。また、装飾品として玉製の人形・獣形の耳飾り（図 24 下）やインゲン豆のような形の耳飾り（図 24 上）が用いられていた。これら玉製の装飾品は同時期の東部地域でも流行していた（図 38）。

食生活についてみると、遺跡からは農具や炭化米が出土しており、そこからすでにかなり発達した農耕が営まれていたと推測される。また圓山文化期の台北盆地は、海水と淡水が交わる湿地であったと考えられており、人々は陸生そして水生生物の資源を巧みに利用しながら生活していた様子が見える。その証拠に圓山貝塚からはオオシジミ・タニシなどの貝類だけでなく、魚の骨、豚や鹿の獣骨が出土している。主には貝を好んで採取し、淡水魚を対象とした狩猟を行いながらも、鹿や豚などの多様な食物が食卓に並んでいた様子が想像できる。また犬も飼われており、



図 21 土器把手（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影



図 22 陶蓋（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影



図 23 有肩石斧（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影

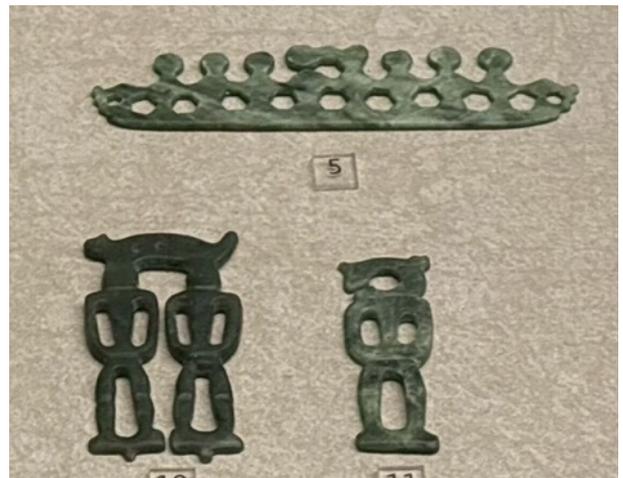


図 24 玉製品（上：玉飾り、下：人形玉器）
（国立台湾史前文化博物館）筆者撮影

豚の飼育の可能性も示唆される。それらの骨から骨角器も制作されている。

圓山文化が分布する台湾北部では環境に適応しながら多様な食物を獲得する生活を営んでいた。漁撈の技術も高く、大型魚を捕獲する技術も保有していた。また貝塚からは食物遺物だけでなく、壊れた土器・石器・装飾品・人骨も出土している。出土した人骨の多くから抜歯の痕跡が見られ、圓山文化圏内に共通する風習であったと考えられる。また土偶の破片も出土している。形態的特徴から女性像であるとする。

一方、新石器時代晩期の北部の文化として、芝山巖（Zhishanyan）文化も知られる。今回は新石器時代晩期の人々が巨石に穿った柱穴（図 25）を見学してきた。標識に示されているところ以外にも複数見つけることができた。しかし陳（2024）によると、黒色彩文土器が出土しており、同時期の圓山文化と異なることから一つの文化として確立されたが、他地域からの突発的な移住の可能性も示唆されており、文化の提唱に反対する意見もある（陳 2024：87 頁）。



図 25 柱穴（芝山巖惠濟宮）筆者撮影

その後北部には植物園（Zhiwuyuan）文化が出現する。植物園の敷地内で見つかった遺跡をもとに名付けられた。今回は遺物などを見学することができなかつたため割愛する。

(2) 南部

台湾南部は新石器時代晩期になると、約 3300～2000 年前に大湖（Dahu）文化が分布する。この文化は高雄市の大湖遺跡を標準遺跡とする。大湖文化の中でもさらに、早期が大湖期、中間が烏山頭（Wushantou）期、そして終盤が魚寮（Yuliao）期と細分される。南科考古館で遺物を見たが、大湖期には赤褐色の土器と灰色の土器があるが、烏山頭期にはほとんど黒色土器になり、魚寮期にはまた褐色の土器に戻っていた。また器種も豊富であった。最初期の大湖期の土器は灰黒色土器が主流になるも、まだ赤褐色の土器も見られた。特徴的なものとしては縁のついた鉢である帯縁盆である。また灰黒色土器は器面が丁寧に磨かれ、無地を基調とするが、屈曲した頸部の下部に施文がみられる。胎土中に砂を混ぜたものや泥質の例があり、中には貝片を混ぜた例もみられる。中間期の烏山頭期もこれら土器の傾向は引き継がれるが、灰黒色土器の割合が大幅に増加し、また器形も壺・鉢・盆・杯・瓶・豆など、より豊富になる。とくに瓶はこの時代に特徴的な形として際立っていた。最後期の魚寮期には灰黒色土器と赤褐色土器のどちらも見られる。また内含面に明るい橙色



図 26 大湖期の土器

（國立台湾史前文化博物館南科考古館）筆者撮影

を持つ灰色胎土の土器（図 28）が出現するのが特徴的である。放射性炭素年代の測定の結果、後続する鉄器時代蔦松文化の鞍子期よりわずかに早い時期とされるが、器形の上では両者に明確な継承関係は見られない（臧・李 2017：190 頁）。

このように、大湖文化の土器は前段階の牛稠子文化とは様相を異にしている。土器製作技術の面でも顕著な差異が見られる。土器は成形された後、陰干しされて焼成されたが、灰黒色土器は赤色土器とは方法が異なる。臧・李(2017)によると、焼成の前半は燃料を加えながら温度を上昇させ、後半の冷却段階でも燃焼を続けつつ密閉して酸素を遮断し、酸欠状態での「焙焼」（いぶし焼き）を行った。この際、粘土中の酸化金属が外部から酸素を得られず、内部から酸素を奪うため、金属イオンが還元されて Fe^{2+} となり、土器全体が灰色～黒色に発色する。これは酸化状態 (Fe^{3+}) での赤色や黄色とは異なる（蔣・李 2017：219 頁）。また土器表面に赤褐色や黄褐色の斑が見られることから、焼成環境が不均一であり、まだ窯を使用せず露天で焼成されていたと推測されている。成形方法についても、口縁部と胴部は別々に成形されており、口縁部には削り跡や手回しるくろによる調整痕があり、胴部内面には手のひら・指・陶托（土製宛具）で整形した際の圧痕や湾曲した跡が残る。これらを成形後に接着し、接合部には「補土」とケズリの仕上げ痕が見られる。また、土器表面には「陶衣」を塗って滑らかにする処理が施されている（臧・李 2017：頁 217）。黒色土器は南部のほか、台湾中部にも同時期に急激に流行し、北部は芝山巖遺跡のみ、東部には認められていない。

また出土遺物として、土器のほかに、紡輪（日本では紡錘車にあたる）・網錘・陶環（環状土製品）・陶珠（土製のビーズ）も粘土を焼成して作られている。網錘や陶輪は黒色が主であるが、陶環や陶珠は赤色であった。装身具には赤色が用いられており、象徴的な色であることが考えられる。



図 27 烏山頭期の土器（瓶）

（國立台湾史前文化博物館南科考古館）筆者撮影



図 28 魚寮期の土器

（國立台湾史前文化博物館南科考古館）筆者撮影

このように土器が豊富に変化した一方で、石器は牛稠子文化と比較して大幅に減少する。最初期の大湖期に橄欖玄武岩の石器は姿を消した一方、代表的なパトゥ（Patu/巴圖）形石斧（図30）がこの時期に登場する。名称はニュージーランドのマオリ人の道具（石・木・骨など多様な素材で作られた武器・祭祀具）に由来する（臧・李 2017：191頁）。烏山頭期では砂岩製のパトゥ形石斧が存在し、これらは使用痕跡から農耕具の一種であると推測される。変質玄武岩の磨製方形石鏃も多く使用されている。この石鏃は形状や材質の統一性が高く、外部から交易によってもたらされたものと考えられる。

遺跡内で作られた石器はどれも精巧に作られている。丁寧な研磨や、石刀や石鏃への螺旋穿孔なども行われていた。石斧は柄部や刃部の使用痕跡から、伐採ではなく耕地の掘削など農作業に使われたと考えられている。石鏃は出土数が比較的多い。また埋葬人骨に石鏃が刺さった状態で見つかるなど、狩猟だけでなく戦闘行為における石鏃の使用もうかがわれる。これら石器から、大湖文化では農耕を中心に、狩猟や漁撈を補助的に行う生活様式を営んでいたと考えられる（臧・李 2017：204頁）。また、墓葬の副葬品として陶輪と網錘の出現に性別差が見られ、陶輪は主に女性の墓から、網錘は男性の墓から出土している。このことは、大湖文化の社会において、性別による分業が存在していたことを示している。ただし、網錘の出土数は少なく、当時の漁撈活動は個人的で、組織的・大規模なものではなかったと考えられる（臧・李 2017：204頁）。

玉製品には、玉環・玉管・玉珠があり、素材にはこちらも東部の閃玉が用いられている。玉環は管状旋截法によって切り出され、穿孔された玉管には両面から螺旋状に掘られた穴が見られる。玉管珠は、この玉管を細かく切断して作られたものであると考えられる（図31）。



図29 粘土製の遺物

（上左：陶管、上右：陶環、下左：紡輪、
下右：陶珠）

（國立台灣史前文化博物館）筆者撮影



図30 パトゥ形石斧

（國立台灣史前文化博物館南科考古館）筆者撮影



図31 玉管珠串

（國立台灣史前文化博物館南科考古館）筆者撮影

従来、新石器時代南部地域では貝類と密接にかかわった文化を形成してきたが、大湖文化期になると一部の遺跡でのみでしか貝類の出土が認められない。また、骨角器の出土も少ない。豚や鹿の骨を利用した骨尖器や穿孔骨器である。生業としては農業が中心で、種子の出土こそ少ないが、三抱竹（Sanpauchu）遺跡からは稲作の痕跡が確認されている。動物遺骸としては陸生動物と海洋生物、また両生類や爬虫類、鳥類も出土している。主要なものとしては豚・鹿・魚である。これらは狩猟や漁猟によって獲得しており、農耕を中心としながらも貴重な食料資源であった。

大湖文化では住居の周囲に墓域が配置されることが多く、集落構造や血縁、家族単位の領域と関係していた可能性が考えられる。基本的に一つの墓穴に一体の遺体が被葬されるが、成人女性と乳児の合葬も確認されている。

最初の大湖期は資料が少ないが、乳幼児の埋葬に甕棺が多く使われ、牛稠子文化の横置きとは異なり直立式で埋葬された。埋葬される乳児はすべて2歳以下であった。中でも五間厝南（Wuchentsu-South）遺跡では被葬者の首部に玉管が70点以上副葬されていた。ほかにも成人墓と同様に小形の碗・瓶・壺を副葬し、食物を死者に供える習俗を見て取ることができる。黒色の乳児用甕棺が特徴的であり、この使用形態には変遷が見られる。第1期は、遺体を大形の土器の中に安置し、口を大きな土器片または蓋で覆う型式（図32）、第2期は二枚の弧状の大きな土器片を上下に合わせて、その間に遺体を挟み込む型式（図33）で、やがて第3期は単に大きな土器片や壺の蓋で覆うだけの簡単な型式へと変化した（臧・李 2017：222頁）。

また、成人の墓も北に頭を向けて仰身直肢葬で埋葬された。一部の個体の手首には灰黒色の泥質陶環（環状土製品）が装着されていた。頭が石で覆われて埋葬された例も見られる。これは覆顔石といい、台湾考古学において極めて珍しい例である。

烏山頭期には居住空間の外周の内側に墓が確認されており、身体を伸ばした状態でうつ伏せにして埋



図 32 甕棺（第1期）

（國立台灣史前文化博物館）筆者撮影



図 33 甕棺（第2期）

（國立台灣史前文化博物館）筆者撮影

葬する伏身直肢葬が行われ、頭を北向きにそろえて埋葬されている。その墓穴も、大湖期は 40 cm程であったのに対し、70～100 cmと深く掘られていることが特徴的である。また頭部に土器を置く例が多くみられる。副葬品は性別や分業を反映したものが多く、男性の墓に網錘が、女性の墓に陶輪が副葬された例がある。生活習慣としては、首のない墓から「首狩り」の風習や、成人男性の墓からは、上顎の両側の側切歯や犬歯の抜歯も確認されている。また一部には、石矛や石鏃などが刺さった状態から、戦闘の痕跡が残る人骨も発見されている。顔面に土器片を貼り付けたり、完全な盆形の土器を逆さにして頭部を覆ったりする例が少数見られるが、陶環などの身体装飾品はほとんど見られない（臧・李 2017：223 頁）。また、発掘された大湖文化期の人骨から顔の復元もされている。

(3) 東部

台湾東部の新石器時代晩期には卑南文化と巨石 (Jushi) / 麒麟 (Qilin) 文化という 2 つの文化が提唱されているが、この二分説には矛盾が生じており、やや混乱した状態にある。今回は実際に訪れた卑南遺跡が標準遺跡になっている卑南文化について説明したい。

「台湾島の中央部には、巨大な中央山脈が南北に走り、西部地域と東部地域の交通を阻害している。一般的にいて東部は「後山」と呼ばれ、人口は少なく、近代化が比較的遅れた地域とされている。つまり、自然地形の影響によって東部地域は相対的に独自性のある文化的様相を呈するようになったと理解することができる」（陳 2024：91 頁）。遺跡の周辺は台湾の先住民族の卑南族の一コミュニティである普悠瑪(Puyouma)族の部落がある。また開発が進んだ、重要な遺跡を含む台南市の南科園區とは異なり、現在でも遺跡が使われてきた当時の様子を感じさせる環境を見ることができる。その環境は「有山有水の良環境」とも称され、海と山に囲まれ、自然が豊かな場所に遺跡は存在する。遺跡の中にもにぎやかな鳥のさえずりが響き渡り、また地元住民の憩いの場にもなっていた。

卑南遺跡を訪れた中で、住居の遺構や遺物が当時の生活様式の特徴を最もよく表していた。住居は卑南遺跡の中でも最も重要な社会文化資料とされており、一つの住居単位は、礫石を並べて構築した通路・前庭・石板で区画された室内空間・西側に設けられた石積み壁・石囲いによる貯蔵施設によって構成される。多数の住居が密集して带状に連なっており、集落全体は都蘭山に向かって東北-西南方向に配列されている。後述する石棺墓も同様の方向に整列している。このような整然と統一された建築様式や生活空間は、緊密な扶助関係によって形成された、約 3500 年前の卑南文化における高度な社会秩序と文化的組織



図 34 遺跡の周辺の様子 (台東市) 筆者撮影



図 35 住居の様子 (卑南遺跡公園) 筆者撮影

を示すと考えられている。このような住居構造は台湾の原住民の住居やベトナムの先住民族の住居にもみられる。

住居の構造を詳しくみてみる。まず「石梯」(図36)は石の階段であり、卑南文化に特徴的な遺物である。石英雲母片岩を素材として、一面5~6個の凹槽を刻み、階段状に加工が施されている。全長約2m、立てかけることで約1~1.2m昇降することができる。ごく少数の出土にとどまり、特別な施設または儀礼的な用途に用いられた可能性が考えられている。壁面に礫石を積み上げて囲われた、方形または円形のピットは、台湾考古学では「砌石圈」(図37)と呼ばれ、住居空間の西側に設けられている。開口径約1~2m、深さ1.5mあり、食糧貯蔵用の地下貯蔵穴であると推測されている。なお、それとは別に住居に関する石積み壁「砌石牆」(図35中央部)も知られる。住居区が土台部分よりも低いため、土台の崩壊や流出を防ぐために護岸上の石積みが構築された。また住居の石壁としての役割も果たしている。この石の壁の配置は、集落全体と同様に北東-南西方向に規則性を示すように整列している。

卑南文化人は台湾の先史時代の中で最も埋葬行為を重視するといえることができるだろう。最も特徴的なものは複数の石板を組み合わせた石棺を用いて埋葬することである。またその数も膨大であり、約1600基の石棺が出土している。そしてその石棺の向きも都蘭山に向かって整列している。住居のすぐそばに墓域を設置しており、故人が現世の集落の住民を保護するような観念が想定される。副葬品としては後述する玉器(玉製品)・土器がある。卑南遺跡の中で最も大きな石棺墓の副葬品は、複数の種類の装身具と玉鏃が一つであった(林佳靜 2024)。玉製品の分類には被葬者が身に付ける装身具類と、被葬者の周りに置かれる道具があるが、ここでは装身具類が3点、複数の種類が副葬されている一方、道具は玉鏃のみであった。ここから、副葬品にも使い分けが考えられる。これを確認するためにはより複数の石棺の副葬品を確認し、副葬品の組成を検証する必要があると考える。

卑南遺跡がある花東縦谷北段の中央山脈地域は、台湾における閃玉(ヒスイ輝石)の唯一の産地である。新石器時代の台湾各地の遺跡から玉製品が出土していることから、広範な物質交流を示



図36 石梯(卑南遺跡公園)筆者撮影



図37 砌石圈(卑南遺跡公園)筆者撮影



図38 「台湾國寶」人獸形玉玦
(國立台灣史前文化博物館)筆者撮影

すものとして考えることができるだろう。中でも特に卑南遺跡の玉製品は、道具・武器・装飾品など多岐にわたり、種類・数量・精緻さの観点でとても優れている。新石器時代中期以降、玉製品は台湾東部先史文化において最も一般的な装身具であり、卑南文化では多様な形態の装身具が発達した。入手困難な貴重な素材であったため、それらの装着は社会的地位を示す象徴であったと考えられている。また、図38の人獣形玉塊は北部の玉製品（図24）の形と一致している。

玉製品の多くは墓域からの出土である。墓域から出土した玉製品には、①被葬者に直接装着された装身具類と、②被葬者の周囲に置かれた工具・武具類がある。まず①被葬者に直接装着された装身具類には、首にかけられる玉管・腕に装着される玉環珠・耳に付けられる玉耳環（図39）等がある。卑南遺跡から出土した複数の玉製品は、「台湾國寶」に指定されている。次に②被葬者の周囲に置かれた工具・武具類には、玉製矛頭形器・玉製鏃・鏃形器・玉鏃

（図37）・玉矛等があり、これらは実際に卑南文化で使用されていた石製の道具を、埋葬用として玉を用いて製作されたものである。装身具類は複数の種類の玉製品が副葬されている一方、道具・武具類は一つの石棺の一つに限られる場合が多い。これは被葬者の生前の役割によるものであると考えられる。穀物農耕段階にある台湾の新石器時代においてはどの程度分業が進んでいたかの解明も今後の課題である。

玉環をもとに玉製品の作り方を見てみると、まず原材料の取得から始まる。これは花東縦谷北段の中央山脈地域など、近隣の溪谷で材料を採取できたと思われる。それを、石英片岩で作った鋸片を用いて玉材を方形に切り出す。切り出された方形の玉材の四隅を切削し、八角形の形に整える。両面から穴をあけ、環状の原形「粗胚」の器形にする。そして砥石を用いて円形に成形し、表面を磨き上げる。最後に仕上げとして、獣皮などの柔らかい素材で表面を研磨し光沢をもたせると完成である。このようにしてできた玉製品が、石棺に多数副葬されたのである。

新石器時代晩期、約3500年前から台湾東部では「細縄文」文様を主体とする土器の装飾が衰退し、無文や赤彩などを塗布した簡素なものが流行するようになる。文様が簡素になる一方で器形は多様化していく。また地域ごとにも器形の多様化が進展し、相互交流や地域ごとの文化的個性など、継承と革新の様子をうかがうことができる。卑南文化においては、口縁が外反し一組の横向きの把手を持つ「侈口雙横把



図39 玉耳環（國立台灣史前文化博物館）筆者撮影



図40 玉鏃（國立台灣史前文化博物館）筆者撮影



図41 雙把圓腹罐（國立台灣史前文化博物館）筆者撮影

圓腹罐」など卑南文化で独自に展開した器種が出現する。卑南遺跡の副葬土器はすべて小形容器であり、そのなかで双把壺が9割以上を占める。

土器は、生活のための土器である「生活陶」と儀式のための「儀式陶」に分類される(李・黄・夏 2013)。生活陶には、卑南文化で独自に発展した器種である、対になる把手とまっすぐな口縁を持ち、胴部が緩くカーブする土器の「双把圓腹罐」(図 41)がある。卑南遺跡では日常的に使用されていたと推測される一方、長光(Changkuang)遺跡から出土したものは乳幼児の棺として用いられた可能性があるなど、遺跡・地域ごとにある文化の継承と革新を見て取ることができる。卑南遺跡において特徴的な儀式陶には、小型の土器の陶杯(図 42)が挙げられる。他の卑南文化の遺跡では副葬されるが、卑南遺跡では文化層中から出土し、当時の祭祀行為との関連が想定される土器である。

卑南遺跡から出土した石器は、農耕用・工芸用の道具、また狩猟用・耕作用の道具など多岐にわたる。農耕用石器には収穫用の石包丁「石刀」と石鎌がある。石針「石錐」は東部で特徴的に出土するもので穿孔具である。また、有溝石棒「有槽石棒」(図 43)も特徴的に出土している。石斧(両刃)や偏刀の端刃石器の「鏟鑿形器」である石鏟・石鑿(図 44)は木製の柄に装着して使用する。狩猟用石器には、石鏃や石槍「矛鏃」があり、これらは日常的に使われるだけでなく副葬品としても出土する。中でも矛鏃は台湾東部で特徴的に出土する。

大型の石造容器は豚の餌槽と考える専門家もいて、家畜としての豚の飼育の存在も期待される。栽培植物としては粟があり、近代以降も山地原住民が粟を栽培していた。国立台湾大学人類学系人類学博物館の展示によると、卑南族も伝統的に粟を栽培しており、環境上の特性、または連綿とつながる地域的特徴の可能性も考えられる。



図 42 陶杯(国立台湾史前文化博物館)筆者撮影



図 43 有槽石棒(国立台湾史前文化博物館)筆者撮影



図 44 鏟鑿形器(国立台湾史前文化博物館)筆者撮影

IV.まとめー日本の縄文文化と台湾の新石器文化

石器の器種を見ると、台湾新石器文化は農耕用の石器が特徴的である。発展した農耕のもと多種多様な農耕具が展開した。石刀・石鑿・石鏃・石斧・石鋤などである。また漁撈に用いる石錘や狩猟用の石鏃・石矛などがある。さらには、オーストロネシア語族にその関連性が示唆されている有槽石棒（有溝石棒）や、ニュージーランドのマオリ人の武器名に名が由来するパトゥ形石器なども知られる。多様な用途に応じた石器がある。その多くは表面が丁寧に研磨された全面磨製であった。最初期の移住者たちがすでに多様な石器製作の方法を備えていたということもあり、早期段階から台湾の多様な石材を用いていた。日本の縄文時代においては、一部の打製石器を除くと、農耕具と判断できる石器は存在しない。器種としては、打製石器には石槍・石鏃・石錐・搔器・削器・石匙などがある。磨製石器には、各種の石斧類がある。全体として、台湾の新石器時代の石器は多様な農耕用石器と石斧類が特徴的である。

土器の施文方法をみると、台湾の新石器時代の特に早・中期では、縄文が特徴的である。器面全面に施文する事例や、一部に沈線を施すだけの土器もある。しかし晩期の東部では無文の土器が主体となる。日本の縄文土器は、縄文の回転施文をはじめ、隆帯や沈線など様々な施文方法がとられている。特に中期以降は器面の装飾が多様になり複雑化する。胎土に着目すると、台湾の新石器時代晩期の南部・大湖文化には貝片を胎土に含む土器が確認されている。縄文文化では、主に早期～前期にかけて「繊維土器」がみられる。土器の胎土に植物や獣毛などの混和材を混入させるものである。焼成方法については、両者とも窯のような設備はまだなく、主に露天で焼成が行われていた。台湾新石器時代後期の南部地域でみられる黒色土器は、焼成の前半は燃料を加えながら温度を上昇させ、後半の冷却段階でも燃焼を続けつつ密閉して酸素を遮断し、酸欠状態での「焙焼」（いぶし焼き）を行う（蔣・李 2017：219頁）。また大坵坑文化の土器には、表面に化粧土「陶衣」をかけた土器もみられる。形式について、台湾の新石器文化は壺・鉢・盆・瓶・豆・杯・罐など多様である。縄文文化は、深鉢から始まり時代の変化とともに浅鉢・皿・壺形土器・注口土器・香炉形土器・器台形土器など豊富に展開した。形式は両者とも豊富であるが、変遷の仕方や種類には固有の差異がある。そして場面用途に分けた使い分けが長い間続けられていた。例えば台湾の新石器時代の土器は、生活の場で用いられる「生活陶」と、儀式に用いられる「儀式陶」に区分される（李・黄・夏 2013）。「儀式陶」はおもに墓の副葬品など儀式に特化した土器で、「生活陶」と明確な違いを持つものであった。この二つの土器分類の間には、明確な形式の違いがある。日本の縄文文化にも同じように、精製土器と粗製土器がある。おもに精製土器は祭祀儀礼に用いられていたと考えられるが、日常的な煮炊きにも用いられる例もあり、この点において台湾の新石器時代と差異が見受けられる。

食糧・食料獲得の手段について、台湾新石器時代は農耕と狩猟中心で、早期・中期は海産資源の利用も顕著である。台湾南部の南関里東遺跡では、早期の時点で稲・粟などの穀物農耕を行っていたとされ（臧・李 2017：117頁）、農耕具も豊富であった。縄文文化はまだ穀物農耕が中心の段階にはなく、狩猟・採集・漁撈が中心であり、クリなどの一部栽培の痕跡や自然の人為的改変も見受けられた。どちらの文化も固有の環境に適応し、それらを活かした食糧・食料獲得手段をとっていた。例えば台湾の新石器文化においては、石器などの道具は農耕に完全に適応した形で定着していた。一方日本の縄文文化では、狩猟や解体用の石器が主であった。

台湾の新石器時代の装身具は、玉製品が特に種類豊富で量も多く、埋葬に伴うことが多い。社会階層を表すものでもあった。玉製品の原料は台東県の豊田が原産地で台湾各地との交易が行われていたことがわかる。呪術的・身分表徴的意味を持つ可能性も考えられる。縄文の装身具は、耳飾り・首飾り・腕輪などの玉製品や土製品、貝製品などがある。また、ヒスイなどの貴重な素材は長距離交易も行われていた。

台湾の新石器時代の埋葬は、時期や地域によってさまざまな埋葬形態を呈する。早期の南部地域では貝塚での埋葬や、土壙墓、また木棺を使用した跡が残る例もある（臧・李 2017：126頁）。遺体の一部を貝殻で覆う風習や、抜歯や首狩りなどの儀礼もみられる（臧・李 2017：129頁）。土器や装身具類を伴いなが、伸身直肢葬で埋葬されていた。中期になると、南部の牛稠子文化の右先方遺跡で6基の大形の甕棺墓が出土している（臧・李 2017：162頁）。後期になるとより地域による墓制の差異が生じる。北部の圓山文化では、貝塚から人骨が出土している。南部では引き続き甕棺が用いられる。特筆すべきことは乳幼児の埋葬にも甕棺が多く用いられていることである。埋葬される乳幼児はすべて2歳以下とされ（臧・李 2017：222頁）、五間厝南遺跡の例では幼児の被葬者の首部に玉管が70点以上副葬されていた。ほかにも成人墓と同様に小形の碗・瓶・壺を副葬し、食物を死者に供える習俗を見て取ることができる。成人の墓も北に頭を向けて仰身直肢葬で埋葬された。頭が石で覆われて埋葬された例も見られる（臧・李 2017：226頁）。そして東部の卑南文化では組み合わせ式の石棺墓が用いられている。現在までに約1600基の甕棺が検出している。多数の土器・玉器・土製品などとともに埋葬を行っていた。また被葬者一人に対して複数の副葬品が伴うことがほとんどである。『卑南考古（1986-1987）』[宋文薰・連照美（1987）]によると、卑南遺跡の第9-10次発掘調査では、合計171基の石板棺から、副葬品を伴うものが71基、伴わないものが100基検出された。このように、台湾の新石器時代では一部の地域や時代を除いて埋葬に副葬品を伴うことが多く、特に卑南文化は顕著であった。縄文時代は主に住居に近接した墓域に埋葬されていた。埋葬の形態も多様であった。「土中に掘られた墓穴に遺体を埋葬する土壙墓、土器に遺体または遺骨を納める土器棺墓、板石や礫で囲った土壙に遺体を納める石棺墓、竪穴住居跡の床や覆土中に遺体を置く廃屋墓（廃屋葬）、貯蔵穴などを墓に転用した転用土壙墓などがある」（谷口 2019）。縄文時代は副葬品を伴わない例がほとんどであり、一部の限られた人被葬者にヒスイなどで作られた装身具類が伴うのみである。ここにおいて、台湾の新石器時代と日本の縄文時代において、身分構造に差異があると考えられるかもしれない。

V. 今後の課題

今回の研究旅行では、台湾各地に所在する新石器時代の遺跡や文化について、主に博物館等の展示資料や解説を通して学び、理解を深めることができた。台湾の新石器時代を一つの時代的枠組みの中で整理し、通時的に把握することを試みた。一方で、土器や石器の地域差を検討し、また縄文文化との比較を行うにあたっては、それらを支える基礎的な知識、遺物観察の視点、比較を行う軸を今後より深める必要性を認識した。今後は、型式学的視点や製作技法、文様構成などについての理解を深め、多角的な考察が可能となるように努めたい。

また、今回の研究旅行では、特に台湾中部地域（台中市・彰化県・南投県・苗栗県など）に関する資料収集をほとんど行うことができなかつた点も課題に挙げられる。それだけでなく、地域間における土

器・石器などの様々な遺物や遺構の差異や人々の生活様式について、十分に検討することができなかつた。今後は、国内では閲覧が難しい台湾の発掘調査の報告書や学術論文を幅広く収集し参照したい。

そして、台湾における「文化」の用語の使い方にも注意したい。台湾は地域や年代によってそれらを一つの単位として「文化」を区別する。日本の縄文時代の場合は、草創期から晩期までのすべての時期を一括りにしているが、現在は異論もある。そのような観点で日本の縄文時代と台湾の新石器時代の比較は重要な意味を持つと考える。

今回訪れた博物館の展示工夫について、有意義な知見を得ることができた。今回訪れた博物館では、台湾の通史だけでなく、台湾における考古学の始まりから、民俗学・現在の科学など様々な方法論が示されていた。それらはとてもかわいらしく、ポップな雰囲気であり、子供から大人まで楽しむことのできる内容であった。例えば、全く今まで考古学に触れたことがなかった小学生が全体を見学すると、ある意味考古学者の卵といえるほど展示の内容が充実していた。また例えば、ジェンダー・自然災害・食生活など、現代社会に関わる様々な問題提起も考古学の観点から展示で扱われていた。そして、日本の縄文文化についても、特に食生活に関するテーマで土器とともに紹介されていた。

このように、台湾における考古遺物の活用方法は、単に資料そのものの解説や歴史的变化を示す素材とするだけでなく、より普遍的な社会的意義をも果たしているということが出来る扱いがされていることが特徴であった。

【参考文献】

川崎保 (2018) 『「縄文玉製品」の起源の研究』 雄山閣

金関丈夫・国分直一 (1957) 「台湾東海岸卑南遺跡発掘報告」『大学校研究報告人文(社会)科学編第3号』 p.47-65 水産大学校

宋文薰・連照美 (1987) 『卑南考古(1986-1987)』 南天書局有限公司

谷口康浩 (2019) 『入門 縄文時代の考古学』 同成社

陳有貝 (2024) 『台湾考古学』 雄山閣

臧振華・李匡悌 (2017) 『南科的古文明』 國立臺灣史前文化博物館

葉長庚主編 (2018) 『巨石，你好！台11線史前散策』 國立臺灣史前文化博物館

李匡悌 (2018) 『島嶼群相：臺灣考古』 中央研究院歷史語言研究所

李坤修・黃郁倫・夏麗芳 (2013) 『土理土器：臺灣史前陶容器特展標本圖錄』 國立臺灣史前文化博物館

林佳靜 (2024) 『卑南文化穿越指南 進階版』 國立臺灣史前文化博物館